

「夕張清水沢アートプロジェクト」を契機とした産業遺産・

旧北炭清水沢火力発電所の保存活用について

The Report on Preservation and Revitalization of the Coalmine Heritage by Art Project

佐藤 真奈美* 吉岡 宏高**

SATO Manami, YOSHIOKA Hirotaka

2011年に開催した「夕張清水沢アートプロジェクト」を契機として、北海道空知旧産炭地域でも最大級の炭鉱遺産・旧北炭清水沢火力発電所の保存・活用が実現した事例から得た知見を報告する。本アートプロジェクトでは、地域の記憶を掘り起こすことに主眼が置かれたアート作品を介して、様々な立場の人々が集まる場が生まれた。いかに地域に寄り添えるアーティストと協働を行うかが、まちづくりや産業遺産の保存にアートを取り入れる上で重要である。

キーワード：地域資源、産業遺産、アート、炭鉱

1. はじめに

北海道中央部、岩見沢市を中核とする空知地域は、炭鉱によってまちが拓かれ、炭鉱と盛衰をともに生きてきた。筆者らが所属するNPO法人炭鉱の記憶推進事業団では、その歴史的な文脈を踏まえ、すでに足もとにある有形・無形の資産(=「炭鉱の記憶」)を手がかりとし、地域再生にむけた取り組みを行なっている。

2011年秋、北海道最大の炭鉱都市であった夕張市で札幌市立大学デザイン学部・上遠野敏教授をアートディレクターに迎え「夕張清水沢アートプロジェクト⁽¹⁾」(以下清水沢アート)を開催した。これは「炭鉱の記憶」を顕在化させることで「炭鉱の記憶」と「アート」の融合により新たな価値を生むと同時に、「炭鉱の記憶」を広く人々に訴える取り組みで、2004年の住友赤平炭坑口浴場(赤平市)、2009年の北炭幌内鉱布引立坑(三笠市)に続き3回目の開催である。舞台となった市中部の清水沢地区には、大型の炭鉱遺産や炭鉱社会を基盤とするコミュニティが今も色濃く残っているが、少子高齢化が深刻化し地域コミュニティの維持が課題となっている。自力で地域再生を行うには厳しい状況にある地域では、社会的な尊敬関係を基盤とした「地域の応援団」を増やす必要があり⁽²⁾、炭鉱遺産そのものを素材としたアートインスタレーション(架設展示)により「炭鉱の記憶」を引き出すアートプロジェクトのプロセスがその引き金となり得ると考えられた。

国内では1990年代半ばより、芸術の専門施設ではない場所、かつその場所ではしか成立し得ないアート形態が見られるようになった⁽¹⁾。産業遺産を利用した例では、銅の精錬所をアート空間に整備した「犬島アートプロジェクト」(岡山市)や、鉱山の旧購買会を会場とした「生野ルート・ダルジャン芸術祭」(兵庫県朝来市)、北海道三笠市出身で自身も炭鉱マンの子息であり、世界的に活躍するアーティスト・川俣正による「コールマイン田川」(福岡県田川市)「三笠プロジェクト」などの例がある。当NPOのアートプロジェクトは、学生を中心としたアーティストが「炭鉱の記憶」の価値を丁寧に掘り起こし洗い出すことに特徴がある。

メイン会場となった「旧北炭清水沢火力発電所」は、

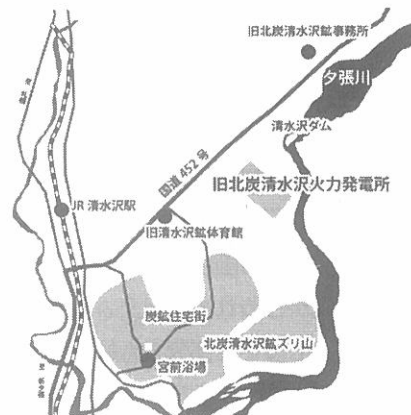


図-1 夕張市清水沢地区(筆者作成)

* NPO法人炭鉱の記憶推進事業団 ** 札幌国際大学観光学部・NPO法人炭鉱の記憶推進事業団

現在民間の産業廃棄物中間処理業者が建物一帯を含めて使用しており、建物の老朽化により使用できるのは「あと2~3年」という状況であった（詳細は次章）。国有林地のため、建物を解体して国に返還しなければならず、10年ほどかけてすでに3/4ほどが解体されている。しかし、作品制作や会場運営に汗を流す学生らや、来場者が満足している様子に所有者が心を打たれ、一転して「10年間は解体しない」（所有者）という意向を示すに至った。所有者の意思の転換は偶発的な副産物とはいえ、地域資源である産業遺産の保存という成果を生み出した清水沢アートを検証することは、地域資源の活用に向けた知見となり得る。

本論文では、地域資源の力を引き出すアートインスタレーションの手法についてアーティストへのインタビューを行うほか、アートプロジェクト来場者へのアンケート調査の分析により「清水沢アート」という場に対する来場者の受け止め方を明らかにし、炭鉱遺産が保存されるに至ったプロジェクトの経緯を報告する。

2. 旧北炭清水沢火力発電所



図-2 旧北炭清水沢火力発電所

旧北炭清水沢火力発電所（以下旧発電所）は、1926(大正15)年に完成した北炭(北海道炭礦汽船株式会社)の発電所である。昭和30年代前半には最大出力74,500キロワット、認可容量49,500キロワットを誇り、わが国有数の自家発電所と言われ、100kmにわたる送電線網を形成した。戦後復興期の北電への電力供給や、坑内ガスの有効利用・微粉炭助燃装置の設置などによる発電効率向上で産業界へ大きな足跡を残し、1991(平成3)年に廃止された。

旧発電所正面には1940(昭和15)年、火力発電所の冷却水を取得する目的で清水沢ダムが建設され、2,000キロワットの水力発電所が設置された。清水沢ダムは1994(平成6)年に北海道企業局へ譲渡、現在も3,400キロワットで発電が行われている。

旧発電所は残存している部分でも幅120m、奥行き15mの2階建てで、空知に残る炭鉱遺産の中でも最大級の建造物であるが、いずれの文化財への指定・登録も受けていない。

旧北炭清水沢火力発電所（以下旧発電所）は、1926(大正15)年に完成した北炭(北海道炭礦汽船株式会社)の発電所である。昭和30年代

3. 作品制作のプロセスとアーティストの意図

今回の清水沢アートでは地域にとけこむことを主眼に置き、半年以上前からコーディネーターが頻繁に地域に滞在し、広報と交流する場を頻繁に用意し、地域に受け入れられるための調整を行った⁶⁾。

アーティストは事前の下見を数度に渡って行い、炭鉱や地域の歴史に詳しい筆者らからレクチャーを受けるなどして、地域への理解を深める努力を行った。開催2週間前からは元炭鉱住宅の市営住宅を賃貸し、滞在制作に入った。滞在中は炭鉱時代から使用されている会社が設置した地区浴場(現市営浴場)に毎日入浴しに行く事で地域住民と直接交流する機会を持った。炭鉱時代の話聞くことで作品のヒントを得たり、地域の子どもたちや元炭鉱マンとともに作品制作を行うことができた。

実際の制作プロセスについて複数のアーティストに聞き取りをしたところ、制作したい作品の形状(「のれん状のもの」「ウェルカムロードになるもの」など)が先に立つこともあれば、下見の時に抱いた印象やレクチャーで得た炭鉱に関する知識から、それを表現するための素材や形状を擦り合わせていくこともあるとの回答を得た。また作品制作の過程で時には現場に落ちている物を再構成して作品に使用する例も多くあった。彼らアーティストを指導する立場でもある上遠野教授は、「常に鏡であれ」と述べた。あくまで主役は旧発電所や「炭鉱の記憶」であり、それらの心を映し出し、そこに流れる物語を紡ぎだすことを念頭に置いた作品制作を行なっているとのことだった。

このような視点で制作された21点の作品のうち、象徴的なものを3点例示する。

①日々の膜(萩原拓矢)

炭鉱住宅街各家のすりガラスの模様がそれぞれに違うことに着眼した。当初は社宅として画一的に供給されたが、築40年を経て子供がガラスを割ったなど各家の歴史により入れ替えられ、様々な模様が入り交じるようになったものである。それらのすりガラスの模様を木炭で和紙にこすり取り、女性が勤務していた施設にのれんのように吊り下げ、家庭と労働を柔らかく隔てる膜のように表現した。

②おたからなあに(トンツキニンと地域のこどもたち)

近所に住む子どもたちと、ズリ山(石炭を採炭した際に一緒に掘り出された不要な岩石を積み上げた山)から宝物を見つけてくるというワークショップを行い、

誇らしげな子どもたち一人ひとりの写真と共に展示した。財政再生団体の夕張に住む子供たちが「不要なもの」の象徴であるズリ山から「宝物」を見つけてくるというプロセスを、子どもの持つ可能性と明るい未来の象徴として浮き立たせた。

③窓際にもういない人

(工藤寛子)

壊れて大きな穴が開いていた窓に、ワイヤーで作った炭鉱マンの像を配置した。実体の無い彼の身体の向こう側に清水沢ダムや旧清水沢炭鉱が透けて見える。それを見て「自らが日本の産業発展を牽引してきたという誇りを胸に秘めているように見える」という解釈もあれば、「坑内災害で逃げる間もなく亡くなった人のように見える」という見方もあった。作品がそこにあることで、壊れた窓だけでは表現できない炭鉱の記憶に思いを寄せることが可能になる。



図-3 作品「窓際にもういない人」

以上のことからアーティストの視点を整理すると、自らが地域の歴史や現状を深く理解することで、そこから記憶の声を代弁するかのような題材を得て、適切な素材で表現するという点に共通性を有すると言える。

このように制作された作品は場に馴染んでいき、もともと旧発電所にある物や自然の植物との境目があいまいになる。来場者からコンクリートの間から生えている芽などを指して「これも作品ですか？」と聞かれることが頻繁にあり、これは同時に来場者が場に存在するあらゆるものに意識を傾け、自らの解釈を挟み物語を紡ぎはじめるという行為の現れであるともとれる。

4. 来場者アンケートによる場の考察

清水沢アート終了後の今年2月に、来場者に向けたアンケート調査⁹⁾を行った。その中で会場となった旧発電所一帯の印象を、短い単語で二つ表現してもらう問いを設けた。最も多い回答を得たのは「力強い」と「懐かしい」で共に11件であった。続いて「美しい」(10件)「圧倒」(8件)「すごい」(6件)と続いた。

来場動機については「炭鉱など産業遺産に関心があるから」と回答した人が最も多く49%、以下「アート・芸術に関心があるから」(26%)「自身や親戚などが、

炭鉱と関わりがあったから」(11%)「夕張に関心があるから」(9%)の順であった。

特徴的であったのは、「懐かしい」と回答した半数の6名が炭鉱と関わりがあった人で、「力強い」と回答したうち6名は産業遺産に関心がある人であった。「アート・芸術に関心がある」人の回答で最も多かったのは「美しい」「むなしい」で、共に3件であった。「むなしい」は全体で4件であるが、同時に回答されたもう一つの単語は「圧倒」(2件)「力強い」「美しい」(1件)であり、マイナス印象の言葉でありながらも、場の威容を表現する文脈で回答されたものと推察される。

自由記述では「アートと産業遺産の融和に感動した」「自分や家族が働いていたので、訪れることができてよかった」「アーティストに案内してもらい、作り手の意思を知ることができてよかった」という記述が多く見られた。課題提起を行う記述としては、「歴史をもっと知りたかった」「もっと地元の人と触れ合いたかった」などが見られた。

「そのままの状態を見たかった」という記述も2件あった。筆者が現場で来場者と言葉を交わした際、「アートはわからない」「今度は建物だけで公開してほしい」という意見を聞くことが何度かあり、このことは、アートイベントにも関わらず多様な動機を持った人々が参集していることを裏付けている。アーティストによるガイドツアーはその溝を埋める役割を持ち、満足度の高い回答の多くが自由記述でアーティストやスタッフと接したことに關して触れられていた。

作品を媒介としてアーティストやスタッフ、来場者に多くの会話の輪が生まれた。また石炭産業は経験者や関係者がまだ多数いることもあり、子や孫とともに訪れ、思い出を語る姿も多くみられた。場の力を引き立て、記憶を映し出すアートをきっかけに、多様な人々が集い、テンポラリーでありながらもともに語らう場を生み出すことができた。

5. “アートによる地域資源の活用”は可能か

「清水沢アート」は、アーティストにより記憶が掘り起こされた威容を持つ力強い産業遺産空間に、様々な人々が集い語らう場を創りだした。結果的にそれらの人々の姿を見た所有者の心を動かし、解体休止・一定期間の保存という成果を生み出すことにつながった。アーティストが場に真剣に向き合い、記憶を掘り起こし、新たな見方を付与し、バラバラの要素をストーリー

ーとして繋ぎ直すといういわば記憶の編集作業は、すなわち地域資源を鏡として来訪者に自らの地域を見せることとほぼ同一であり、来訪者との交流を志向する観光まちづくりの出だしの一步であるといえる。

しかしこのことは、アートという手法が地域資源の活用方策として効果的であると一般化するものではない。むしろアートの手法を取り入れるのであれば、地域の事情を徹底的に理解するという姿勢で作り手が挑まなければ、作品が空間から浮いてしまい、「アートは理解が難しい」と逆に嫌忌されてしまう恐れすらある。いかに地域に寄り添えるパートナーといえるアーティストと地域が協働できるかという点が、まちづくりや産業遺産の保存にアートを取り入れる上で最も重視されるべきである。

6. 今後の課題

清水沢アートの作品は、旧発電所所有企業の意向により現地に残され、今夏～秋の間「清水沢アートパワープラント」と名前を変えて常設展示公開を行った。今後も同様の展示や様々なアート空間として活用を図る予定である。

「炭鉱の記憶」を掘り起こすアートプロジェクトは、今秋は三笠市の住友別炭石炭積み込みホッパーを舞台に開催した。これはホッパーの解体工事着手と報じられた直後に当NPOが所有企業と交渉し、「壊すの反対」ではなく「残すの賛成」の姿勢を具体的に示すための活用方策の一つとしてアートプロジェクトの開催を提案し、一年間の賃貸契約を結んで開催したものである。廃止されて年月が経った「遺産」を所有する企業の多くは、補修に対する負担や損壊の危険性への対処がのしかかり、解体の機を伺っているのが現状である。当NPOも空知のアイデンティティとも言える炭鉱遺産の解体消失回避に取り組んでいるところではあるが、やみくもに保存を叫ぶのではなく、優先順位をつけた上で、何らかの用途での活用や、朽ちて自然に還るさまを見せることも選択肢に含めている。

清水沢アート終了後、地元町内会からNPOへ地域行事への参加要請が増え、共に行動する機会が増えている。昨年春にプロジェクトをスタートし、清水沢アートを経て、清水沢という地域にこれまでにないほどの多くの視線が注がれ、この地域の地域資源である「炭鉱の記憶」が持つ魅力や価値が地域内外に認知されはじめたという手応えも、感じはじめた。

しかし、アートを機に地域内外の人々の手により整備を始めた北炭清水沢鉱山跡の階段作りやJR清水沢駅での写真展など足掛かりは築きながらも、人々が集まる「場」として恒常的に機能するには至っていない。国内随一の規模を持つ夕張市石炭博物館ともリンクし、これらの地域資源の価値を最大化する仕組みを検討していく必要がある。今後もこの地域に関心を寄せる人々へむけた情報発信⁶⁾で組織化を図るなど、地域内外・世代の枠を超えた人々が「ともに歩む地域」を目指して集まる場をマネジメントし、活動を継続していくことが課題である。

謝辞：札幌市立大学上遠野敏教授・学生、夕張市清水沢地区、東亜建材工業株式会社の皆様には大変お世話になった。この場でお礼を申し上げる。

【補注】

(1) 旧北炭清水沢火力発電所・北炭清水沢鉱山跡をメイン会場に、清水沢地区一帯で2011年9月17日から10月16日までの土日祝13日間開催し、約1,000名の来場者があった。同大看護学部健康講座や清水沢の地域資源に着目した開催行事も実施した。

(2) 当NPOは2008年より清水沢の「炭鉱の記憶」に関心を寄せる地域外の人々との交流による観光によるまちづくりの提案を行い、その後も現在まで地域での参与観察を進めている。過去の経緯は参考文献2) 3) 参照。

(3) コーディネーターのうち一人は人類学を専攻する博士課程の大学院生で、調査研究を兼ねて地域の人々と連携調整を担った。研究成果は以下で発表。

小西信義 (2012)：夕張市共同浴場が現在にもたらすもの - 鉱山協働浴場考 -、鉱山研究、89、pp.20-25

(4) アンケート対象者総数442件。質問紙を送付し返送により回答する形態を取り、回答数82件・回答率18.6%。本文中に記した項目の他に「催事情報の入手手段」「満足度」「他人に勧めるか」「有料の場合支払える金額」について質問を行った。

(5) ホームページ <http://www.shimizusawa.com>

【参考文献】

1) 豊原正智・谷智(2002)：「アートプロジェクト」という名の回路相互触発を生じさせるための構想と実践、芸術大阪芸術大学、No.25、pp.88-100

2) 佐藤真奈美・吉岡宏高(2008)：地域資源としての炭鉱遺産の評価に関する考察-夕張市清水沢地区でのタウンウォッチングを事例に、日本観光研究学会全国大会学術論文集、No.23、pp.1-4

3) 佐藤真奈美・吉岡宏高(2009)：地域内外の双方向的な交流による観光まちづくり-夕張市清水沢地区での「炭鉱住宅オープンハウス」を事例に、日本観光研究学会全国大会学術論文集、No.24、pp.289-292